

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第52回

万葉の川心まんのよしのかわごころ

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

おほとものさかのうへのいちづめ
大伴坂上郎女の柳の歌

(巻第八 一四三三番歌)

うちのぼる佐保の川原の青柳は

今は春べとなりにつけるかも

春は、待つもの。そして、満を持して突然訪れるもの。そんな気がしていた。

また春が来た。夏も秋も冬もあまり「待つ」という気がしないが、心に冬が来た時などは、もうあがいても苦しんでも逃れようがない。平穏な日が訪れることを待つしかない。時が経つのを待つしかない。日本人の心には、どんな底が来れば、じつと耐えていれば、いつか上がる日が来ると本能に刻まれているらしい。その根拠は、必ずやって来る春にあるのかもしれないと、桜の花びらが散りゆく中でひとり思った。

恋しい人が離れている時、病床に伏している時、身を案じる思いは尽きることなく溢れ出る。一つ前の一四三三番歌で、大伴坂上郎女はこう詠んでいる。

「わが背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも見むよしもがも」・・・あなたが見ておられるだろう佐保の青柳を、手折ったその枝だけでも、私は見るすがほしいことよ。大切な人、案じている人が手折ったという青柳さえ見れば、元氣なことが分かる。一枝から手に伝わる何かが自分を安心させてくれるはず。冬は長い。果てがないように思われてくる。しかし、どんな

に寒くても花は鳥はその訪れを感じ取る。殻を脱ぎ、芽を出し、蕾をふくらませる。人はただじつと待っている。自然が予感を運んでくる。そして今、流れにさかのぼっていく佐保の川の青柳が、目の前で一斉に若芽を見せている。すっかり春になったのだ。待ち望んでいた春になったのだ。そのよろこびを瑞々しく表現している。

前回でも記したとおり、大伴家持は、父である大伴旅人を亡くしてから、叔母であるこの歌の作者大伴坂上郎女に育てられた。坂上郎女は才色兼備で、万葉集に載せられた歌も八十四首あり、家持に大きな影響を与えたとされている。また、写真の碑は、奈良市法蓮町にある佐保小学校の南側を流れる佐保川沿いの船橋緑地公園内にある。

春は別れの季節でもある。春が運んでくるのは喜びばかりではない。出会いと別れ。ただそれは、必ず何かの始まりになる。次への大きな一歩になる。柳は枝を切られても切られても、壮大な生命力で新しい芽を吹き出していく。ふと見上げると、あたたかな日差しが降り注ぎ、川原では子どもたちが、柳の下で元氣な声を出していた。

「はじめのいっぽ」。「だるまさんがころんだ。」
時は春。初めの一歩を、踏み出しましたか。

